

異世界に飛ばされた

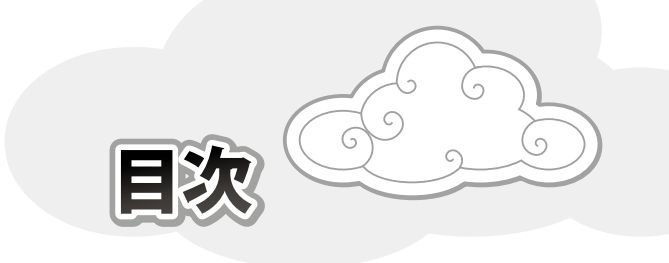
Where is Ogasan going in another world?

おっさんは 何処へ行く？

6

マンガメント
ci saretta





目次

第③章

最愛の人との再会

.....

219

第②章

子供たちの新たな一歩

.....

151

第①章

パミル王都 孤児院再生

.....

007



主な登場人物

タクマ

異世界に飛ばされて
きたおっさん。
趣味を楽しみながら
異世界を旅する。

夕夏

タクマの婚約者。
死んだはずだと
思われていたが……

シンザ

夕夏に仕える、
鼠の従魔。

マロン

夕夏に仕える、
牛の従魔。

タクマの仲間達



ヴァイス



ゲール



アフダル



ネーロ



ジュード



ブラン



レウコン



ナビ



アルテ



ヴェルド

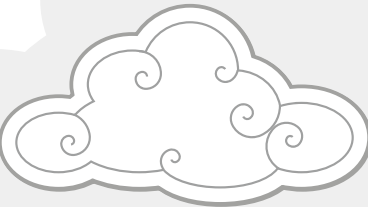
フルウム

夕夏に仕える、
羊の従魔。

第①章

パミル王都

孤児院再生



1 頼みと子供たちへの謝罪

次元の切れ目に落ち、異世界ヴェルドミールに飛ばされてきた普通のおっさん、タクマ・サトウ。不器用ながらも心優しい彼は、孤児や行き場をなくした人々を保護し、鉱山都市トールラン近くに作った集落で、彼らと一緒に暮らしていた。

そんな折、タクマはパミル王国王都が邪神に取り憑かれている事に勘づく。邪神という厄介な存在と対峙しながらも、彼は幾多の困難を乗り越えてその浄化に成功する。

しかし、騒動の中心地となった王都の教会で、タクマと同じ転移者——瀬川雄太が遺したという言葉を知った事で、彼はさらなる厄介事に巻き込まれてしまうのだった。



「一つ頼みがあるんです」

ここはパミル王国王城の謁見の間。

トールランの領主コラル・イスル、聖遺物の研究者ナール・イシューと共にやってきたタクマは、

パミル王と宰相ザイン・ロットンに一連の報告を終えたところだった。続いてタクマは、パミル王に要望を伝える。

「他にも似たような遺物があれば、教えていただきたいです」

「それは、今回の写本では足りんという事か？」

今回の写本とは、遺跡に記されていた壁画をナールらが写し取った物の事である。それは壁画ではなく、瀬川雄太が日本語で遺したメッセージだった。

「足りないというより、彼が伝えようとしたすべてを知りたいんです。彼が遺した壁画は、俺のような者がこの世界で生き抜くために用意してくれた物らしいので」

タクマが珍しく熱っぽく言うので、王は意外に感じた。

「何故そこまで、その人物に固執する？」

「俺はこの世界に飛ばされてきた時から恵まれていました。ヴァイスと出会い、他の守護獣とも出会えた。そして今はたくさんの家族に囲まれている。ですが彼は俺とは違う。たった一人で飛ばされてきて、一人で生き抜くしかなかった」

それからタクマは、自分と瀬川雄太が元いた地球の事、そしてこのヴェルドミールと地球の環境の違いを伝えた。

ひと通り聞き終えたところで、王は感心して言う。

「……なるほどな。タクマ殿たちが生きていた世界は、本当に恵まれた世界だったのだな」

それから王は黙り込んでしまった。しばらくそうしていると、やがて何かを決断したように口を開く。

「わかった。君の望むように遺物について調べようではないか。この国は君に救われたのだ。すぐに追加の報酬として用意しよう」

王に促され、その場にいた宰相、コラル、ナールが調査のために退室していった。タクマが頭を下げて王に礼を言うと、王は苦笑いをして手を振って告げる。

「これくらい、大した事ではない。ただ、君がその人物に入れ込んでいるのが少し気になるな。彼は過去の人物なのだ。あまり引きずられるのは駄目だぞ。君は今を生きているのだから」

「わかってます。ただ、彼の足跡を知っておく事が、彼の弔いにもなるような気がしているんです」

タクマは、王の言うように入れ込みすぎている自覚もあったが、もし彼が弔われていなければ、自分が供養してやろうとさえ考えていた。

王はいつもの淡々とした雰囲気とは違うタクマを見て、感慨深げに言う。

「君は他人にまったく興味が無いようで、親身になったりもするんだな。まあ、これからは君とは良い隣人として付き合えたら嬉しい」

こうしてパミル王への報告は終わり、解散となった。

タクマはそのまま空間跳躍で移動し、王都にあるコラルの別邸に戻った。辺りはすでに暗くなり、

屋敷には明かりが灯されている。

タクマが家の中に入ると、子供たちが迎えてくれた。

「あ、お父さん！」

「おかえり！」

「おかえりなさい！」

「お疲れさまー！ お仕事はもう良いの？」

タクマは子供たちの頭を撫でながら言う。

「ただいま。みんな、今日はお城で嫌な思いをさせてごめん。それについてちよつと話があるから聞いてくれるか？」

子供たちにさせた嫌な思いというのは、王城に子供たちを連れていった際に、怖そうな騎士たちに囲まれてしまった事である。

全員で応接室に移動してから、タクマは尋ねる。

「今日、お城に行ってみてどうだった？」

「えっとね、いっぱい兵隊さんがいて嫌な気分になったの」

「怖かったよねー」

「目が変わった！」

「野宿してた時にいじめてきた人と同じ感じだった」

子供たちが言うように、騎士たちには異様な雰囲気があった。というのも、あの時彼らは邪神の呪いを受けていたのだ。

「確かに感じが悪かったな」

「あ！ あと、何かドロツとした感じがした！」

「空気が重かった」

「黒いものがいっぱいだった」

「なんかねー、スラムにいる人たちみたいだった」

子供たちは騎士への違和感だけでなく、あの場に漂っていた瘴気しやうきも感じ取っていたらしい。普段から訓練をしているため、そういうものを察知する感覚が鋭くなっていたようだ。

「へえ、何か雰囲気も悪かった感じか？」

「うん！ 空気がズシンとした感じ？」

それからタクマは、子供たちが理解できるように噛み砕いて教えてあげた。

「なるほどな。実はあの時いろんな事があって、みんなおかしくなっていたんだ。お前たちには嫌な思いをさせてしまったが許してくれるかな？ 王様も他の人たちもすぐ反省をしていたから許してあげてほしいんだ。おそらく明日にでももう一度お城に呼ばれて、直接王様が謝ってくれると思う。今日のような事はきつとないだろうから」

そう言って子供たちの目を見ると、皆理解してくれているようだった。

「大丈夫そうだな。孤児院から逃げた子たちは、王様が責任を持って助けてくれるようだから安心していい」

邪神によって、孤児院を管理していた教会が機能不全に陥り、孤児院から子供たちが逃げてしまっていた。その保護については、タクマが王様と話をつけてあった。

子供たちは、孤児たちの無事を聞かれ、顔を見合わせて笑顔になった。



翌朝、夜が明け切らない時間に、城からの使者がやってきた。タクマが言っていたように、城へ上がるようにとの呼び出しだ。

タクマは、まだ起きたばかりの子供たちに顔を洗わせ、それから朝食を食べさせた。子供たちは王都に来てからしばらく経つが、ホームシックになる事もなく食欲も旺盛わうせいだ。

「食べ終わったらお城へ出発だ。王様には元気に挨拶するんだぞ」

「[[[はーん]]」

子供たちが食事をしている間に、使用人にコラルの所在を確認すると、どうやら彼は昨日から王城に残り、遺物の調査を続けているらしい。

使者からは、今日の謁見は正式な方法で登城してほしいと言われていたので、使用人たちに命じ

て子供たちを礼服に着替えさせる。子供たちはいつもラフな服を着ているため窮屈^{きゆうくつ}そうだ。

「お父さん。これ着ないと駄目？」

「きついいよー」

「暑いー」

「動きにくいー」

子供たちが礼服を嫌がるので、タクマは優しく諭^{さと}す。

「今回は正式に城に招待されているから、正装じゃないと駄目なんだってさ。俺も着替えるし、我慢してくれ」

タクマも普段の服を脱いで、スーツに着替えた。

「これを着るのも久しぶりか……まあ、こっちの世界の正装ではないが、かっちりした服だし問題ないだろう」

タクマのスーツ姿は、子供たちからも概^{おおむ}ね高評価だった。

こうして着替えを終えたタクマたちは、用意された馬車に乗り込んで城へ向かう。子供たちは緊張しているらしく口数が少ない。

城に着くとコラルが待っていた。目の下には隈^{くま}が浮かび、疲れた表情をしている。どうやら完徹^{かんてつ}して調査してくれたようだ。

「タクマ殿、みんなもよく来てくれた。昨日は子供たちに嫌な思いをさせてすまなかった。今日は

そんな事は絶対にないから安心してくれ」

謁見の間へ進みながら、コラルがタクマに言う。

「タクマ殿。例の遺物だが、かなり多くの物が残っていた。まだ精査はしていないのだが、城にある分を見た限り、一人の異世界人が遺しているような感じだった」

遺物については王から話があるそうなのだが、コラルは前もって教えてくれたらしい。タクマはコラルに礼を伝える。

「わざわざありがとうございます。急いでいるわけではないので、今日でなくても良かったのですが」

「そうはいかん。国のトップから頼まれたのだ。すぐに用意せねば私の沽券^{こけん}にも関わる。それに、遺物は国外にもあるようだし、のんびりもしていられないからな。そちらの方も各地に飛んでいる諜報員^{ちほういん}に情報を集めさせている」

そうなふうに話しているうちに謁見の間に到着した。コラルが大きな扉の前で声を上げる。

「タクマ・サトウ殿と子供たちをお連れしました。入ります！」

扉が開いて中へ入る。謁見の間で待っていたのは王と宰相だけだった。子供たちの事を気遣い、人払いしてくれたらしい。

王と宰相はタクマたちに向かって深く頭を下げ、それから王が告げる。

「よくぞ来てくれた。昨日の事を謝りたい。本当にすまないと思っている。許してほしい」

子供たちは王から謝罪されて戸惑っていたものの、にっこりと笑みを浮かべて頷いた。王も笑みを返し、さらに子供たちに向かって言う。

「ありがとう。ではさっそくだが、君たちに聞かねばならん事があるのだ。こちらで聞かせてくれるか？」

王は子供たちをソファアに座らせると、女性を入室させた。

「この者が、君たちが話した事を文字に起こしてくれる。同席を許してくれるか？」

子供たちが頷くと、王はさらに続けた。

「では始めよう。教会と孤児院の問題は、君たちのお父さんが解決してくれた。それで、その問題の被害者でもある孤児たちを国で引き取る事になったんだが、君たちが孤児たちを見たという場所を教えてほしいのだ」

子供たちが話し始める。

「えっとねー。孤児院近くの水路と、屋台がある所にもいたの。それと、宿屋さんの近く！」

それから王は、一人ずつ話をさせていった。彼らの話した内容を書面に残し、ひと通り話を聞き終えたところで、王は懐から一枚の紙を取り出した。

「これに、孤児たちがいた場所を示してもらえるか？」

それは王都全域の地図だった。続いて王は子供たちに筆のような物を渡し、地図を指し示しながら説明する。

「君たちが泊まっているコラル・イスル侯爵の家はここだ。孤児を見た時の事を思い出しながら、どこに孤児たちがいたか書いてみてくれ。終わったら教えてもらえるか？」

「[[[うん]]]」

子供たちは相談しながら、地図に書き込みだした。

王は、子供たちが作業を始めたのを確認すると、タクマに手招きをした。タクマは王に連れられてソファアから離れる。

「では、まずは嵩張るこちらからだ」

そう言うと王は、数人の役人を入室させた。役人はたくさんの書物を持っていた。

「君が求めていた転移者に関する遺物についてだ。城にあった、転移者や召喚者の遺物に関する資料をまとめてある」

役人たちはタクマの前に百冊以上の本を置いていくと、そのまま部屋を出ていった。どうやら他にも持ってくる物があるらしい。

「とりあえず、書物の類はそこにあるのが全部だ。そして次が、おそらく転移者や召喚者に関係していると思われる魔道具。これらもタクマ殿に報酬として渡したいと思っている」

続いて役人たちが持ってきたのは、タクマにとって見慣れた物だった。王は魔道具だと考えているようだったが……

王はタクマの反応を見てから、ゆつくりと口を開く。

「魔道具と言ったが、実は我々では起動すらままならん代物だ。起動するにも膨大な魔力がいるらしく、今まで起動できた者はおらん。タクマ殿は何かわかつているようだが……差支えなければ教えてもらえんか？」

「これは、私の世界で使う製品ですね。この世界で使えるように魔道具化されているのは確かですが……」

タクマは役人の持ってきたスマホを手に取り、王の目の前に置く。それから自分のスマホを取り出して王に差し出した。

王が二つのスマホを見比べて、感心したように声を漏らす。

「これは……似てるな」

「スマホといって遠話のカードみたいな道具です。その他にもたくさんの機能があります」

「ふむ。だが、それが出土したのは五百年以上前だぞ？ 場合によっては千年近く経っている物もある。何故、時代が大きく違うのに似ているのだ」

タクマが使っているスマホと、過去に出土した物が似ている。この事はタクマにある閃きを与えた。

「もしかしたら、私がこの世界に飛ばされてきた時、一緒に巻き込まれた転移者がいて、飛ばされた時代が異なっていたのかもしれない」

今まで考えた事はなかったが、そういう可能性はむしろ高いのかもしれない。当時タクマは人ごみの中にいたので、次元の切れ目に落ちたのが自分だけと考える方がむしろおかしいのだ。

「私が次元の切れ目に落ちた時、あの場所にはたくさんの人がいました。彼らが同じ切れ目に落ちたとしたら」

「なるほど。そうした者たちがこの世界にやってきて、タクマ殿とは違う時代に飛ばされてしまったという事か」

「ええ、そうかもしれません」

王は辛そうな表情になった。

「何という悲劇なのだ」

「確かに悲劇でしょうね。平和な日本から、簡単に命を落とすこの世界に来たのですから」

タクマは、異世界に飛ばされてきたかもしれない者たちに思いを馳せた。自分は運良く様々な加護を得られたが、彼らと同じだとは限らない。

タクマの表情が沈んでいくのを見て、王が声をかけてくる。

「だが、タクマ殿は今を生きているのだ。彼らを知る事は大事だろうが、それに引きずられる事のないようにな」

「同じような事をこの前も言われましたよ」

そう言ってタクマは苦笑いを浮かべ、役人が持ってきた書類や様々な電化製品をアイテムボックス

スにしまっていく。

タクマが片付け終えたのを見て、王が告げる。

「城で保管している物はこれですべてだ。だが、今後も各地から集まってくるだろうな。その場合は、集まり次第コラルに知らせよう。さて、ようやくだが、今回、邪神の支配から王都を救ってくれた礼を渡そう」

王は使用人を呼びつけると、数人がかりで大きな袋を十ほどタクマの前へ運んでくる。

「一袋1億G入っておる。それが十袋、10億Gだ」

「随分と奮発しているようですが、大丈夫ですか？」

あまりの金額なので、タクマは自分の報酬のせいで国民の生活に迷惑がかかるのではないかとさえ思ってしまった。

王が笑みを浮かべて答える。

「これは、国の危機のために蓄財しておいたもので問題ない。君は国の危機を救ってくれたのだから少ないくらいだ。ここは遠慮せずに受け取ってくれ。まあ、これ以上はさすがに出せないがな」

タクマの報酬は、国が出せるギリギリとしてくれたそうだ。タクマはありがたく受け取る事にした。

2 女神の覚悟

タクマが王と話をしている頃、この世界の女神であるヴェルドは白い空間で右往左往していた。「どうしましょう。タクマさんが他の転移者の存在に気づいてしまいました。早く言っておくべきでした」

ヴェルドは、いつか打ち明けようと思っていたのだが、どう話して良いか迷っているうちに、タクマに勘づかれてしまったのである。

「それに、邪神が動きだしていたとは気がつきませんでした」

神であるヴェルドが邪神に気づかないはずはないのだが、魔法国家マジルに天罰を与えたり、民の前に顕現したりしているうちに見逃してしまったというわけである。

ヴェルドは頭を抱える。

「どう話したらいいでしょう」

ヴェルドがウロウロと動きながら考えをまとめようとしていると、ふと声が聞こえてくる。

『ヴェルド神、タクマさんが邪神の意思と邂逅したようですね。それに他の転移者についても……』
ヴェルド以外存在していないはずの空間に響き渡ったのは、美しい声である。

それは、タクマの元の世界の神、鬼子母神の声だった。鬼子母神はタクマに加護を与えている神

の二柱である。

ヴェルドは驚きつつも、その声にすがりついた。

「鬼子母神様!? そうなんです、どうしましょう!？」

『どうしようも何も正直に言えば良いでしょう。邪神に関しては、タクマさんが自分で判断するでしょうし』

鬼子母神は呆れながらそう話すと、厳しく言い放った。

『また、あなたは光の存在として、闇を消そうとする本能が刷り込まれているようですね。それに對して、タクマさんは清濁併せ呑む考えを持っています。光が強くなれば闇もまた強くなる。光と闇、どちらもなくってはならない、彼はそう考えています』

ヴェルドは、鬼子母神の話を黙って聞いていた。

闇は滅ぶべきと思いつけてきたヴェルドだが、鬼子母神の話は不思議と納得できるものであった。それを受け入れる事はできなかったが。

「……私がやっている事は間違っていないはずですよ」

鬼子母神は少し呆れるように語りかける。

『光がある限り闇もあつて当然。どちらも必要な存在なのです。あなたが認めたくないと思うのは仕方がないのかもしれませんが……それはひとまず置いておくとしても……』

「他の転移者の事ですよね……」

二柱はため息を吐いた。鬼子母神が責めるように言う。

『次元の裂け目ができてしまった事、そこに落ちてしまった人がいる事は、不可抗力であると思います。ですが、何故タクマさんに他の人間がいると言わなかったのです? 初めに言っておくべきだと思うのですが』

ヴェルドは苦々しい表情で弁解し始めた。

「タクマさんがいる時代には転移者はいないので、そう言っておけば大丈夫だろうと思い、言いませんでした。突然飛ばされてきたのですから、他の事まで話してしまうと負担になると思ったのです」

ヴェルドはタクマを氣遣つて言わなかったらしい。それが正しいとは本人も思っていないかったが、まずは生き抜く事だけを考えてほしかったようだ。

『氣遣うのも理解できますが、やはり話しておくべきでした。彼は話せばわかってくれたでしょう』

「ええ、そう思います。近いうちにタクマさんはここを訪れるでしょうから、その際に話そうと思います」

ヴェルドがそう言うと、鬼子母神はアドバイスする。

『起こってしまった事は仕方ありません。ですが、情報は重要です。タクマさんのためにもしっかりと話してあげてくださいね』

「はい」

続けて、鬼子母神は尋ねる。

『ところで、タクマさんよりも前の時代に飛ばされた人たちにも、力は与えたのですよね？』

「それはもちろんです。私と会う事がなかったので、タクマさんほどの強大な力は与えられなかったのですが、生き抜く力は与えました」

『そうですか。それでしたら良かったです……』

鬼子母神の声は、白い空間から薄れるように消えていった。

「タクマさん……早めに来てくださいね」

ヴェルドは祈りながら、タクマが来るのを待つのだった。

3 保護依頼

「おとーさん！ 終わったー」

タクマと王が話している所まで走ってきた子供たちがタクマに抱きつく。

「お、ちゃんと孤児たちがいた場所を教えてあげたんだな。偉かったな」

「うん！」

「あの子たち大丈夫かなー？」

「早くいっぱい食べられるようになるといいね」

「きれいな服も着られるといいねー」

子供たちは、王都の孤児たちの身を心から案じているようだ。タクマは子供たちを撫でながら言う。

「保護できれば、孤児たちもお腹いっぱい食べられるようになるし、清潔な服を着て遊べるようになるだろうな」

タクマは王の方へ顔を向けた。

「これで子供たちの仕事は終わりですか？」

「ああ、これからすぐに騎士団を使って孤児たちの保護にかかろう。タクマ殿の子供たちの用事は終わったが、このままトーランに帰るのか？」

「騎士団ですか……いえ、まだ王都に残ろうと思っています。おそらくまた、子供たちとヴァイスたちの力をお貸しする事になると思いますから」

タクマの意味深な言い方に、王は怪訝な顔をする。

「どういう意味だ？ つまり、騎士たちは孤児たちの保護に失敗するとも考えているのか？」

「そうです。おそらくそうなるのではないかと」

王が眉根を寄せて尋ねる。

「フム、理由を聞いても良いかな？」

「はい、今回保護しようとしているのは、大人を怖がっている孤児たちです。騎士たちが探しに行ったのでは、孤児は姿を現さないと思います」

孤児が大人を怖がっていると聞いて、王はいまいちピンと来ていないようだった。タクマはさらに続ける。

「孤児たちは、邪神の贄にえにされそうになったのを察知して逃げました。そんな怖い経験をしたのですから、警戒するようになって当然です。武装した騎士が探しに行つては逃げてしまうでしょう」

「むむむ、そうは言っても、騎士は子供たちを保護しようとしているのだぞ？」

「子供たちは、安全なはずの孤児院で怖い思いをしました。何を信じていいのかわからなくなつていてもおかしくありません」

王は頭を抱えてしまう。

「で、ではどうしたら良いのだ？ 宰相、何かいい案はないのか？」

宰相に助けを求めると、宰相は頷いて答える。

「タクマ殿が解決策も持っていると思います。そのために王都に残るとおっしゃってくれたのでしよう」

「？ タクマ殿は保護に失敗するだろうから子供たちと王都に留まると……そして、子供たちと守

護獣たちに……あつ、そういう事か！」

王も気がついたようだ。

「タクマ殿の子供たちと守護獣たちならば、孤児も警戒しないはずだと」

「ええ、そうですね、タクマ殿」

宰相がそう言つてタクマの方を見ると、タクマは頷いた。

子供たちはポカンとしている。何故自分たちが話題に上がっているのかわからず、混乱しているらしい。タクマは補足するように告げる。

「本当はそちらで解決するのが一番なのですが、今回は難しいと思います。子供同士であれば警戒をしないでしようし、守護獣たちは子供たちに好かれていますから」

ヴァイスたちは普段、身体を小さくしているので子供に警戒される事はない。そのため今回のような役回りには適任なのだ。

ふと思いついたように王が尋ねる。

「そういえば、守護獣たちは今どうしているのだ？」

「コラル様の邸宅に待機させています」

それからタクマは、念のため子供たちと守護獣にちゃんと説明したうえで、さらに依頼という形にしてほしいと伝えておいた。

王は大きく頷き、宰相とコラルの方へ顔を向ける。

「改めて確認するが、やはり任せた方が良いか？」

二人もタクマの案に賛成のようで首を縦に振った。それからコラルが進言する。

「騎士たちが孤児を無理やり保護する事もできるでしょう。しかし、それでは後で問題が出てくると思います。やはりここはタクマ殿の意見に従い、この子たちと守護獣たちにお願ひするのが最善かと。もちろん、子供たちには最小限の武装をさせた護衛をつけて、安全を図った方が良いと思いますが」

王も、完全に納得したようだ。

「そうだな。無理やり保護しても逃げだしてしまう可能性もあるしな。では、タクマ殿の子供たちとヴァイス殿に依頼をさせてもらおう。タクマ殿、ここから直接空間跳躍を行なう事を許可するの
で、すぐにヴァイス殿たちを連れてきてもらえないか？」

タクマは頷くと、子供たちに顔を向ける。

「お父さんはヴァイスたちを連れてくるから、ここで待っていてくれるか？」

子供たちが頷くのを確認し、タクマは空間跳躍でコラル邸に跳んだ。

邸宅の中庭に出たタクマの目の前には、守護獣たちがいた。彼らは、芝生の上でのんびりと過ごしていた。

タクマに気づいた、狼のヴァイス、虎のゲール、鷹のアフダル、猿のネーロ、ドラゴンのジュー

ド、兎のブラン、蛇のレウコンが、それぞれ順番に声を上げていく。

「アウン！（父ちゃんだー！）」

「ミアー！（おかえりー！）」

「ピュイ？（子供たちがいませんね？ 何かありましたか？）」

「キキ？（何か仕事ー？）」

「キュル？（燃やしに行く？）」

「クウ（お仕事ー）」

「……（……大変な仕事？）」

みんな嬉しそうにして、タクマに駆け寄ってきた。また、タクマが子供たちを連れておらず、一人だけで戻ってきた事に、何かあると感じ取ったようだ。

「お前たちに王から依頼があるんだ。とりあえず王城まで来てほしい」

タクマがそう言うと、ヴァイスたちは快く頷いてくれた。タクマはすぐにヴァイスたちを連れて城に戻った。

到着してすぐに、守護獣と子供たちは王から依頼について聞く事になった。子供たちは孤児の保護という大役を任された事に驚いていた。

アフダルが心配そうに言う。

「ピユイ、ピユ（身体を小さくしてしまうと護衛の際に支障が出ます。せめてもう一回り大きくさせていた方がいいのですが）」

今回、怯えている孤児を保護するため、守護獣たちにはなるべく小さくしてもらおう事になっていた。タクマはアフダルの言った事を受け入れ、結局、ヴァイスたちは体長1mほどで行動する事になった。

王が、子供たちと守護獣たちに向き合う。

「皆、受けてくれて感謝する。命令ではなく依頼としてお願いするので、報酬はもちろん用意させてもらう。どうか孤児たちの保護を頼む」

その後、謁見の間に騎士たちが入ってくる。といっても彼らの格好は、孤児たちを怯えさせないため一般人の服装だった。なお、腰にはナイフを隠し持っている。

孤児を探しに行くのは、子供たちが中心で、ヴァイス、ゲール、ネーロ、ブランが同行する。残りのアフダル、ジュード、レウコンは、タクマと共にフォローに当たる事になった。

タクマはみんなに告げる。

「じゃあ、行ってこい。お父さんはちゃんと見守っていてあげるからな」

こうして子供たちは守護獣たちと騎士たちを引き連れ、意気揚々と出発していった。タクマは自分の腕に留めていたアフダルに声をかける。

「さて、子供たちは行ったな。アフダル、子供たちの様子を上から見ててくれ。俺も後から合流す

るから」

「ピユイ（お任せください。何かあれば念話を入れます）」

タクマが謁見の間にある窓から腕を出すと、アフダルは大きな羽を広げて飛び立った。王が声をかけてくる。

「タクマ殿。子供たちが搜索に行ったというのに冷静だな。心配ではないのか？」

王は、タクマに余裕がある事が気になったようだ。護衛の騎士が付いているとはいえ心配すると思っただけらしい。

「私と同じくらいに強いヴァイスたちも付いているのに、心配する必要がありますかね？ ヴァイスたちは、私を除外すればほとんど敵なんじゃないですよ。普段は温厚な奴らですけど、敵は容赦なく倒します。そんなヴァイスたちが傍にいますから、心配していません」

タクマはヴァイスたちに絶対の信頼を置いている。彼らがいれば子供たちは安全だと言いきれるくらいに。さらにタクマは続ける。

「皆さんには鳴き声にしか聞こえないでしょうけど、あいつらは念話で言葉を発しています。ちゃんと考える事もできて、言葉も理解しているんです。手加減とかも上手ですしね。俺よりもよっぽど護衛に適任ですよ」

「何と!? 守護獣たちは思考ができるのか！ それだったら、タクマ殿が安心して子供たちを送り出す理由がわかる。そうか、彼ら守護獣は力だけでなく、知性まで持っているのか……」

タクマの話聞いて、彼が躊躇なく子供を送り出した理由は理解できたが、王にはまだ疑問があった。それは、タクマの子供に対する態度についてだ。

「タクマ殿。もう少し付き合ってくれ。まだ聞きたい事があるのだ」

タクマは子供たちを見に行つてあげたかったが、王からそう言われて我慢する。

「すまん。どうしても気になったのでな。君が子供たちを愛しているのはよくわかるのだ。だがな、だからこそ違和感がある。何故君は子供たちの名前を呼ぶんだ？ ここにいる間もそうなのだが、コラルの邸宅でも同じだと聞いた。何か壁を作っているように感じてな」

王は子供たちに接するタクマを見て、彼が子供たちをとてども大事にしていると感じていた。だが、そのタクマの口から子供の名が出る事がない。不思議に思つてコラルに尋ねると、彼もまたタクマの口から子供たちの名前を聞いた事がないと言う。さすがにそこまで愛しているなら、会話で名前を口にするのが当然だというのに。

「今ここで話す事でもないと思うんですが……まあ、良いでしょう。子供たちの名前は把握してまです。だけど、あえて口に出さないようにしているんです」

タクマは言いづらそうにしながら、その理由を話し始めた。

彼はもちろん、子供たちの名前を引き取る時に聞いている。だが、子供たちは自分の名前を名乗る時に辛そうな顔をしたのだ。まるで名前を嫌悪しているかのように。引き取った後もアークスが名前を呼んだりはしていたのだが、その度に表情が暗くなってしまっていた。それに気づいたタク

マは、何かいい案が浮かぶまでは名前を呼ばないようにしたというわけである。

「俺が保護するまでに辛い経験をしたでしょう。名前を呼ばれた事でそれを思い出してしまうのなら、なるべく呼ばないようにしようと考えたのです。名前を呼ばなくても、今のところ問題はありません。子供たちの方も、俺がそうしている事に気づいているので、お互いに上手くやっているという感じですね」

タクマが説明し終えると、王はきょんとした表情になっていた。宰相とコラルも同じような顔をしている。

「ん？ 何か変な事を言ってますかね？」

そう言つて首を傾げるタクマ。コラルはふと違和感を覚え、タクマに尋ねる。

「タクマ殿。君は子供たちを孤児として保護したのだよな？」

「孤児として？ いえ、俺はあの子たちを自分の家族として引き取りましたよ？」

タクマの返答を聞き、コラルは子供を受け入れる時に手続きに間違いがあった事に気づいた。そしてそれをタクマに伝える。

「私も確認をせずに承認してしまったのだが、あの子たちは孤児として保護された事になっている。家族にはなっていないぞ」

「どういう事でしょいか？」

タクマは驚き、コラルを見る。

「孤児を引き取る時、孤児か家族かどちらか選べるのだ。保護の名目で預かるという方法と、初めから家族として迎え入れるという方法だ」

「俺の場合は前者だったと？」

「そうだ。子供たちの名前をそのままにするために、あえて保護の方を選んだと考えていたのだ。だからこそ、名前を言わない事に違和感を覚えたというわけだ。タクマ殿が家族として引き取ってあれば、名前を変更する事ができるからな」

タクマは頭を抱えた。どうやらタクマの指示が家令かれいのアークスに伝わっていないかったようだ。タクマは家族として引き取ると言ったつもりだったのだが、アークスは違った取り方をしてしまったらしい。

「では、子供たちの手続きをやり直せば悩む必要はないと？」

「そうだ。家族として引き取る場合、子供たちは新たな人生を歩む事になる。本人次第だが、引き取られた者たちはほとんど名前を変更している。引き取った親とのつながりを強くする意味合いもあるのだ」

それを聞いたタクマは、すぐにアークスに念話を送る。

（アークス。聞こえるか？）

（はい。どうかしましたか？）

（子供たちの事だ。どうやら俺とアークスの行き違いで、子供たちは保護扱いで登録されているら

しい。家族としての引き取りに変更するから準備を頼む）

（やはりでしたか。当時はどちらか判断がつかなかったもので、保護の方で登録を行なったのです。タクマ様にしっかり確認すべきでした。タクマ様が帰り次第、手続きをできるようにしておきます）

（すまない。俺が説明すべきだった）

タクマは自分の言葉が足りなかったと素直に謝る。

（いえ、私も確認しなかったのです。家令としてそこはしっかりとご意向を確認すべきでした）

（子供たちには俺から説明して謝っておく）

タクマは念話を終わらせ、再び王たちの方に向き直る。

「アークスに念話で確認をしたところ、誤って孤児として登録していた事がわかりました。トーランに帰り次第、登録を家族に変更します。名前は子供たちと考えたいと思います」

「うむ。タクマ殿もおつちよこちよいで残念な面があるのだな。子供たちの未来もかかっているのだからしっかりせねばならんぞ」

王は自分の残念さを棚に上げ、タクマを諭した。

それを聞いた宰相、コラル、タクマはこう思った。

（（お前が言うな!!））



残念な王に残念だと言われた事はさておき。子供たちの様子を見に行く前に、タクマはこれから保護されるであろう孤児たちの暮らす環境について確認しておく事にした。

というのも王都にあった孤児院は、タクマが邪神を浄化する際に粉々にしてしまったのだ。孤児院は再建する予定らしいが、そんな短時間で建てられるはずもない。

「保護した孤児はどこに住まわせるのでしょうか。城で育てていくのですか？」

「ああ、城内の礼拝堂とそこにある来賓専用らいひんの寝室があるから、しばらくはそこで面倒を見るつもりだ」

「人員の方は？」

「市井しぎに下った元貴族を採用する予定だ。最低限の学があり、民の常識も併せ持ち、階級にこだわりのないような人物を考えている」

王はすでに打診を行なっているようだ。子供たちの今後がかかっているので、人選は厳しく行なうという。

「なるほど。それは何日くらいで集まりそうですか？」

「そうだな、明日には人選が終わって面接が始まるだろう。複数の面接官を使い、どのような人物

か見極めていくつもりだ」

子供たちとの相性も大事なので、人選と面接が終わったら、さらに子供たちに会わせて相性を見るらしい。タクマは疑問を挟む。

「子供たちの負担が大きくなってしまいそうですね。何より、城で生活させるというのは気を遣わせると思えますし。そうだ、提案があるんですけど聞いてもらえますか？」

「なんだ？」

「城で面倒を見るのではなく、コラル様の別邸で預かるのはどうでしょうか。王城に孤児を住まわせるのは問題でしょうし、孤児にとっても負担になりますから」

タクマがコラルに視線を向けると、コラルは頷いた。続いて、タクマは孤児院の再建についても提案する。

「孤児院の建物も、俺に任せてもらえないでしょうか？」

「孤児院もか!? ……むしろ助かるが、どうするつもりなのだ？」

王は心配そうにしているが、傍にいたコラルが進言する。

「パミル様。おそらくタクマ殿には考えがあるのでしよう。孤児院の建物もタクマ殿に任せてみたらどうでしょう？ 建設に使う予定の予算を報酬とすれば問題ないかと」

「うむ……タクマ殿に負担がかかってしまうが良いのか？」

心配する王を安心させるように、タクマは自信を持って返答する。

「ええ。孤児たちが辛い思いをしないように、最速で孤児院を用意してみせます」

コラルはすぐに使者を出し、孤児たちの保護に協力してくれる事になった。別邸は元々空いている部屋がたくさんあり、孤児を預かるのは問題ないらしい。

「では、孤児院の建設はタクマ殿に一任する。敷地は教会跡地。あの土地を初の国営孤児院の土地としよう。今後、王都の孤児院は国が運営する。教会には手出しをさせん」

王は、王都では教会と孤児院を分ける決定をした。これは、今後の国の方針としてのモデルケースと考えているようだ。

「では、宰相は関係各所で人選を急げ！ 急いでいるからといって手を抜く事は許さん！ コラルはタクマ殿の補助！ よいか、ここからはスピードが最重要となる。自分の能力と伝手^{ツテ}を総動員して事に当たるのだ！」

「はっ!!」

宰相とコラルは気合の乗った顔で謁見の間を出ていく。

王はタクマに言葉をかけた。

「タクマ殿。長く引き留めてしまつてすまない。君に任せる事を決めたからには、人員の確保に関してはこちらも本気を出そう。君がどうやって孤児院を建てるのか楽しみにしている」

王はタクマを挑発するように言う。

「良いでしょう。そちらが人を用意するのと、私が孤児院を用意するのとどちらが早いか競争です

ね。宰相様の様子から、人選を間違ふ事はないでしょうが、ミスは許されませんよ？」

タクマはニヤリと笑って挑発し返した。

「む！ 急ぐ事になったとはいえ舐めるなよ？ 我が国には頼りになる者がたくさんおるのだ。必ずや最高の人材を厳選してみせる！」

案の定タクマの挑発に乗ってきた王を、タクマは笑いながら受け流す。

「では、俺も動きますので、結果を楽しみにする事にしましょう」

そう言うタクマは、空間跳躍を使って王都上空に移動した。

上空で、タクマはアフダルに報告をもらい、子供たちの様子を見る。

そんなふうに子供たちの頑張りを確認しながら、スマホで異世界商店を起動して、孤児院用の建物を探すのだった。

4 保護一日目

子供たちはやる気に満ち溢れていた。人の役に立つチャンスなのだ。ちなみに護衛の騎士たちは極力口を出さないように気をつけている。

子供たちは屋台の並んでいる目抜き通りから一本裏の路地へ入っていった。そこは、本通りとは違って、人の気配がまばらだった。

「んー、この辺りにいたんだけどなー」

「もしかしたら、その水路はどうだろう？」

「でも狭すぎないかなー？」

子供たちはそんなふうに話しながら、水路に躊躇なく足を踏み入れていく。それを見た騎士は顔をしかめて注意する。

「お、おい！ そんな所に人がいるわけ……」

「僕たちも同じようなところで住んでたよ？ この奥広くなってるかもー」

騎士の言葉をさらっと流して、子供たちは水路の奥へどんどん入っていった。

騎士はため息を吐き、ずぶ濡れになりながら子供たちに付いていく。しばらく奥へ進むと子供たちの言う通り、広い空間につながっていた。

そこで目に入ってきたのは、多くの孤児たちが横たわる姿だった。皆一様に顔色が青く、栄養状態が悪い事が一目でわかった。

「なんという事だ、これは……」

騎士たちは孤児たちが死んでいると思ったようだ。しかし、子供たちは孤児たちの様子を窺い、彼らがわずかに息をしている事に気づいた。

「ヴァイス！ お父さんと呼んで！ お父さんなら何とかできるでしょ!？」

「アウン！」

ヴァイスは子供たちに返事をする、すぐにタクマに念話を送った。

（父ちゃん！ 孤児たちが十人倒れてる！ 動けそうにないから助けに来て！）



子供たちが水路を探索している頃、タクマは王都上空でスマホとにらめっこしながら困惑していた。異世界商店に、ヴェルドミールの新しい商品が追加されていたのだ。

「これは……ヴェルド様が異変に気づいたと見るべきかな？ 慌てて孤児たちのための商品を用意してくれたんだらう。きつと今頃、説明をどうしたら良いか悩んでいるんだらうな」

新しく追加されていたのは、建物が二種類、遊具が五種類、魔道具が一種類だった。タクマはそれらを細かく確認してみた。

一つ目の建物は名前はそのまま「孤児院」と出ていた。最大で百人収容できる施設のような。食堂、キッチン、お風呂が付いており、布団等の生活に必要な物資も完備されていると説明があった。ただし、湖畔の屋敷のように建物の魔道具化はされておらず、ごく一般的な建物だった。

タクマが二つ目の建物を調べようとスクロールしていると、ヴァイスから緊急の念話が届く。ヴ

アイスはかなり慌てており、切迫した状況のようだ。

タクマはスマホをいったんしまい、念話に応答する。

（どんな感じで動けなくなっている？）

（口がカサカサしてて、みんなゲツソリしてるー。それに息が今にも止まりそう！）

ヴァイスの言葉から、脱水症状と栄養失調に陥^{おと}っている可能性が高いと判断する。子供は代謝が良いので、水分や食事を摂らないとすぐに衰弱してしまうのだ。

（今行く！）

タクマはそう念話を送ると、すぐにヴァイスの所へ跳んだ。

子供たちが孤児を励ますように声をかけている姿が目に入った。

「すぐにお父さんが助けに来るから!!」

「頑張つて！」

「もうすぐだから！」

「目を開けて！」

子供たちの叫びを聞きながらタクマが近寄っていくと、子供たちはタクマが来たのに気づいて泣いてしまう。

「お父さん！ 早く助けてあげて！」

「早くしないと死んじゃう！」

「わかつてる。大丈夫だ」

タクマは子供たちを撫でて安心させてから、孤児たちにヒールをかけてあげた。

衰弱は怪我とは違い本来ヒールの対象ではないので、気休めにしかない。ただ、体力は多少回復したようで呼吸は安定した。

「俺がこの子たちをコラル様の家に連れていく。お前たちは引き続き他の子たちを探すんだ」

「で、でも……」

子供たちは泣きそうな顔をしている。

「この子たちが心配なのはよくわかる。だが、こうしている間に他の孤児たちも同じような状況だったら？ お前たちは孤児の保護を依頼されたんだろう？ だったら何を優先すべきだと思う？」

タクマにそう言われ、子供たちは依頼の本当の厳しさを自覚した。子供たちが冷静になろうとしているのはタクマにもわかった。

子供の一人が唇を噛み、辛そうに言葉を紡ぐ。

「そうだね。心配だけど、僕たちには何もできないよね。だったら、他の子たちを探すのが僕たちの仕事……」

「そうだ。苦しいだろうが、この子たちはお父さんに任せて依頼を頑張ってくれ。ヴァイスたちに言ってくれば、お父さんはすぐにこうして助けに来るから頑張ってみなさい」

悔しそうに立ち上がった子供たちの目は、やる気に満ちていた。子供たちは騎士たちに付き添われて水路を出ていった。

頼もしい後ろ姿を見送ったタクマは、孤児たちを範囲指定すると、そのままコラル邸の庭へ跳んだ。

庭には、コラルが回復魔法の使い手と医者を用意してくれていた。コラルもまた万が一を考えて、いろいろと手を打ってくれていたのだ。

コラルは使用人たちを総動員して子供たちの治療に入った。タクマはその場をコラルに任せると、再び上空へ戻る。



孤児たちをタクマに任せた子供たちは、水路から出てすぐに移動を開始した。

以前、孤児たちを目撃した地点に行ってみたものの、孤児の姿は見えなかった。子供たちは経験を総動員して、孤児たちが隠れられそうな場所をしらみつぶしに探していく。

しばらくして、裏路地の人^{ひと}気の無い所で座り込んで動かない孤児を五人発見した。先ほどの孤児たちとは違って話ができる状態だった。

「ねえ、僕たちと一緒に行くかう？ 僕たちのお父さんが君たちの居場所を作ろうとしているんだ」

「……やだ、またいじめられる」

彼らのいた孤児院では食事も満足に与えられなかったうえに、暴力まで受けていたようだ。子供たちは、孤児からそうした事を聞きながら説得を続けた。

「あのね、僕たちも君たちと同じ孤児だったんだ。だけど、お父さんのおかげでこうして幸せに生きている。そのお父さんが君たちの居場所を作るって言っているんだ。もし行った先で前と同じ事になったら、お父さんがやつつけてくれるから大丈夫！ だから、ね？ 一緒に行くかう？」

孤児は、涙目で子供たちを見つめる。

「……信じて良いの？」

「うん！ 僕たちと僕のお父さんを信じてほしいな」

「ごはん食べられる？」

「お腹いっぱい食べられるよ。暖かいお布団で寝られるし、きれいな服も着られる。お勉強も楽しいよ」

子供たちは自分たちの経験を孤児たちに話しながら説得する。

「でも、私たちだけ助かるのは……」

「水路にいた子たちはもう先に行っているよ。それに、他の場所にいる子たちもみんな探すつもりだから！」

子供たちの真剣な説得は孤児たちの心に響いたようだ。目の前の子供たちを信じてみようという気持ちで、孤児たちの間に芽生えていく。

「みんな一緒に暮らせる？」

「もちろん！」

「……だったら、私たちを助けて！ もう暗いところは嫌なの」

みんな助かるという言葉聞いた孤児たちは、安心するあまり泣きだしてしまった。

子供たちは孤児を不安にさせないように笑顔で手を引いて馬車に連れて行ってあげた。そうして、コラルの邸宅へ戻っていくのだった。



子供たちは五人の孤児を馬車に保護してコラル邸に戻ってきた。

彼らは孤児たちをコラルが用意した医師に引き渡すと、タクマを探して応接室へ移動する。一緒に戻ってきたヴァイスたちは家の中が大騒ぎなのを感じて庭で寝転んだ。

「おかえり」

王都上空から先回りして戻っていたタクマは子供たちを迎える。タクマの顔を見た子供たちが今日の成果を報告する。



「今日はお父さんに連れていってもらった十人の他に、五人の子を保護できたよ」

「みんな疲れきっていたの」

「それに、残っている仲間の事を心配していたの」

「泣いてた……」

子供たちは今日一日で保護を完了できると思っていたのにそうならず、少し不満げな表情をしていた。

「これだけ保護をできたのは大したものだと思うけどな」

そう言ってタクマが褒めてやっても、子供たちの表情は優れなかった。子供たちが一日で保護を終わらせたいと考えたのには理由があったのだ。

「だって、明日からはもっと大変になると思っただもん」

「仲間がいなくなったら警戒するでしょ？」

「さらにわかりづらい所へ行っちゃう」

「危険な場所に行っちゃうかも……」

子供たちは、そこまで考えていたようだ。孤児の仲間が急にいなくなれば、残された者たちは警戒をしてしまうのは当然だろう。そうなれば、探すのはますます困難になってしまう。

「なるほどな。だけど他の方法もあると思うぞ？ 今日保護した子たちの中には動ける子もいるだろう？」

タクマは答えを言うのではなく、ヒントを子供たちに教えてあげた。すると、子供たちは気づいたようで反応を示す。

「そっか！ その子に手伝ってもらえば良いんだ！」

「隠れている場所も知ってるかも」

「安心して、来てくれるかも」

「でも……手伝ってもらって良いのかな？ 疲れているだろうし」

動けるとはいえ、疲れている孤児たちを利用するのが気になるという子供たちに、タクマは説明してあげる。

「お前たちは優しいから、疲れている孤児たちを使うのは嫌なんだろうな。だけど、その子たちも自分の仲間を助けたいと思っているんじゃないのかな？ それに、さっき孤児たちを見てみたけど、食べて寝れば動けるくらいにはなってたぞ。まあ、今日は疲れて寝てしまっただろうから、明日の朝に話してみたらどうだ？」

タクマと子供たちが話し合っていると、コラルが応接室にやってきて子供たちに声をかける。

「おお、今日は大活躍だったな！ あの子たちは衰弱しているが、回復して眠っているぞ。後から来た子たちはお腹が空いているだけだった」

水路で保護した子たちは引き続き治療が必要なようだ。動けなくなるほどに衰弱してしまっていたので、時間がかかるのは仕方ないだろう。後から来た子たちは体力が残っていたので、栄養を

摂って寝れば回復するとの事だった。

「良かったー!」

「ひと安心だね」

「明日の朝に話してみよう!」

「協力してくれると良いな」

子供たちは全員が無事に回復すると聞いてとても喜んでいる。それから、明日に保護した子たちに協力を要請してみようと相談を始める。

そんな真面目な子供たちにコラルは声をかける。

「さあさあ! 君たちも疲れているだろう? 風呂に入ってさっぱりしたら食事しましょう。明日の事は食事後にじっくりと相談すればいい」

「[[「はーん!!!」]]」

コラルは子供たちを用人に案内をさせて風呂へ移動させた。タクマとコラルは子供たちがお風呂に行くのを眺めながら情報のすり合わせを行なう。

「最初の孤児たちは危険だった。少し遅れていれば、命も危なかったかもしれない」

コラルはそう言うため息を吐き、孤児を助けられて安堵あんどしたようだった。

「私も見た時かなり危ないと感じていました。無事に持ち直してくれてよかったです」

「だが、不衛生な所で生活をしていたので病気になっていた子もいた。今は薬を飲ませているから

大丈夫だが」

回復魔法の使い手と医師たちの速やかな対応により、孤児たちは一命を取り留めたらしかった。

「明日以降は、搜索が大変になるだろう。孤児たちも警戒してしまうだろうから」

コラルが子供たちと同じような懸念を示す。しかし、大人だけあつてその対応策もわかっていようだった。コラルは続けて言う。

「だが、後から保護した孤児たちに協力を頼めば、順調に進むだろうな」

「ええ、自分の仲間が説得に来れば、自然と警戒は緩みますから」

孤児たちに関してひと通り話し終えると、コラルは話題を変えて、孤児院について話した。

「ところで孤児院の建物は大丈夫なのか? 我が王にあそこまで言ってしまったのだ。やっぱり無理でしたでは済まされんぞ」

「もちろん大丈夫です。すでに当たりは付けてありますから。明日には準備を済ませますよ」

コラルは、タクマがいろんな仕事を抱え込んでいたので、孤児院まで手が回るか心配していたのだ。タクマの返答を聞いて安心したコラルは笑みを浮かべて言う。

「そうか。君も動きっぱなしで疲れただろう? しつかりと休んで事を進めてくれ」

「ありがとうございます。コラル様も徹夜明けなのでこれから、食事後は休んでください」

「ははは! 君が私の気遣いをするか。最初の出会いから考えれば丸くなったものだ。まあ、君の敵となった者への態度は変わっていないがな」